

まえがき

人生を長い上り坂に喩えた作家の山本周五郎は、名作『ながい坂』（一九六六）を通して、次のようなメッセージを残しました。——一足飛びに頂上へあがるのも、一步一步と登ってゆくのも、結局は同じ頂上に着く。ならば一步ずつ登る方が、途中の色々な風物を見ることができると、その一步一步をたしかめてきた自信が、強い力になる——

戦後の荒廃した日本で倫理運動を興した丸山敏雄は、『万人幸福の栞』の巻末に置いた論文「死は生なり」の中で、次のように書いています。

一步一步ふみしめて、進んで止まぬ努力を重ねていると、生に善悪の二色があり、禍福の両面があり、明暗二つの側があつて、千変万化極らないあやを織りなしている。こうした生活の味わいを、世相の妙を、まず目に見、身に体现してくると、刻々に生の喜びが感じられてくる。かくて、生命の歓喜におどり、有の実相に解けて、力一ぱい生きぬいて、豊かに、朗らかに、その時その場の「全」に生き、呼吸してくる。そして我は、個の生ではなくて、宇宙一ぱいに、みち広がり、古今に通じて生きている絶対の世界に住む。

この時、その生は、すでに死を内含^{ないがんちようこく}超^こ克^くして、絶対の生、まことの生に転じている。

この一文だけを目にしたのなら、〈なんとオーバーな言い方か〉と思われるかもしれませんが。しかしそこに示されているのは、ある時には死の不安にも苛^{さい}まれながら、人生の真理を追い求めた人が到達した、深淵にして玄妙な境地です。そこに坂道とは書いてありませんが、「一歩一歩」と踏みしめて進むことの大切さが説き示されています。

そうした人生の真理に丸山敏雄が開眼し、「純粹倫理」と称して世に問うまでには、実に多くの人々との出会いや交わりがありました。

両親はもちろんのこと、「学問の旧師」と慕った西晋一郎（広島高等師範学校および広島文理科大学の恩師）、「真理の恩師」と仰いだ御木徳一（宗教教団「ひとのみち」の教祖）に対する尊崇の思いはとりわけ深く、多大な影響を受けています。どちらの恩師も敏雄が「純粹倫理」を発見する上で、欠くことのできない人たちでした。

筆者はライフワークの一つに、「丸山敏雄の研究」をあげています。倫理運動の創始者について、正しく深く知ることとは、あとを受け継ぐ者たちに課せられた使命です。四半世紀余り前

に倫理研究所の理事長を拝命した筆者も、折々に、色々な角度から丸山敏雄に関して調べたり書いたりしてきました。その中に「丸山敏雄をめぐる人たち」も含まれています。二人の恩師を除いて、これまで『倫理研究所紀要』に掲載した拙稿に、採り上げたのは次の六人でした。

□ 森信三——丸山敏雄とは広島高等師範学校の後輩にあたり、戦後に「全一学」を提唱した哲学者、教育者。

□ 津田左右吉——戦前に日本神話の「述作説」を唱えた東洋史学の泰斗。

□ 湯浅真生^{まきお}——「ひとのみち」時代の先輩格の准祖で、弾圧事件の裁判では共に闘った同志。

□ 川面凡児——独特な靈魂論^{みたま}や禊^{みそぎ}の行法を体系化した戦前の神道家。

□ 天野貞祐——高名なカントの研究家で、文部大臣も歴任した、戦後のベストセラー『生きゆく道』の著者。

□ 鳥居武二——「ひとのみち」時代から丸山敏雄に師事し、戦後に倫理運動が興ると遅ればせながら馳せ参じて奮闘した丸山敏雄の愛弟子。

丸山敏雄との関わりをめぐるそれら六人について書いた論文に加筆補訂し、一冊にまとめたのが本書です。

なお、拙著『丸山敏雄と日本』（二〇二二）には西晋一郎と御木徳一という二人の恩師について書いた論文を収録してあります。また湯浅真生と天野貞祐についての論考も同書に組み入れたのですが、今回あらためて加筆補正を加えました。

丸山敏雄の五十九年に及ぶ人生は、前半と後半で大きく分かれます。三十三歳で長崎女子師範学校の首席教諭に抜擢されてからしばらくは、将来を嘱望される教師（専門は歴史地理）として順風満帆でした。ところが後半は、苦悩に満ちた波乱の道のりを歩むことになります。その人生行路については断片的に本文の中にも出てきますが、敏雄のことをまだよく知らない読者のため、すぐあとに略年譜を載せておきます。

本書を手にしてくださる方々の、丸山敏雄に対する理解が少しでも深められることを願いつつ。

令和三年十二月一日 丸山敏雄の没後七十年を目の前にして

著者

【丸山敏雄略年譜】

明治二十五年 五月五日 福岡県築上郡合河村字天和（現在の豊前市天和）に農家の四男として

生まれる

十一歳のときに近くの用水池で溺れ、近所の青年から命を救われる

十五歳で准教員養成所に入り、尋常小学校の代用教員となる。以後、教師の道を歩む

十七歳で小倉師範学校に進学。「孔子丸山」のニックネームがつけられる

大正五年 広島高等師範学校に進み、卒業後は福岡県内の中学・高校に赴任して歴史や地理を教える

十四年 十二月 三十三歳で長崎県女子師範学校的首席教諭として栄転

カトリック信者の熱烈な信仰に驚嘆し、さらに深い研究をすべきと痛感する

昭和四年 広島文理科大学に入学し、古代日本の歴史・宗教・思想を研究。古典籍に記載されている「奇跡」の解釈に苦しむ

卒業論文執筆中に新興の「ひとのみち」教団を知り、直ちに入信。奇跡について調べ、自らも体験する。卒業論文として「我が国古代に於ける神人交感に関する研究」を提出

昭和七年 春 内定していた師範学校校長職をなげうち、「ひとのみち」の指導者を志願して修行に励む。熊本支部長として赴任中に「見神」を体験。二年後に准祖に抜擢される

十二年 四月 「ひとのみち弾圧事件」が勃発。教団幹部の一人として検挙され、激しい拷問を受け、一年有余の獄中生活を強いられる。仮出所後は大阪府堺市の寓居で暮らし、長い裁判に挑む。（一審二審ともに執行猶予付きの有罪判決）

二十年 東京に移住して迎えた終戦の直後に「夫婦道」の稿をおこし、事実上の倫理運動が始まる。二年後に月刊誌を刊行し、組織的な活動を展開。獅子奮迅の働きをし、「身代わり」の誓いも捧げる

二十六年 十二月十四日 東京都武蔵野市の高杉庵にて永眠。享年五十九

□附記——本書の表記について

◆人物の敬称は略します。丸山敏雄について略記する場合は姓ではなく名（敏雄）にします。

◆引用文の旧漢字旧仮名遣いは、ほとんどを現代表記に改めます。ただし、丸山敏雄の手書き文字の雰囲気を残すために、あえてそのままでの仮名遣いしておく場合もあります。

◆読みやすくするために、次の例のように、現代では特殊な読み方をする漢字を平仮名に直す場合があります。

・「これ迄」↓「これまで」 ・「なつて居る」↓「なっている」

・「と云ふ」↓「という」 ・「としている所の」↓「としているところの」

・「其の」↓「その」 ・「未だ」↓「いまだ」

・「何んとも」↓「なんとも」 ・「殆ど」↓「ほとんど」

◆あえて平仮名にせずにルビを伏す場合もあります（たとえば「頗る」↓「すこぶ頗る」）。

◆「そのまゝ」は「そのまま」、「たゞ」は「ただ」と表記します。

◆出典を示す『全集』は『丸山敏雄全集』（倫理研究所刊）を指すとし、他の場合は『森全集』『津田全集』『川面全集』『天野全集』などと略記する場合があります。

至心に生きる——丸山敏雄をめぐる人たち……目次

まえがき……1

第一章 「いのち」とコスモス

——森信三と共通の恩師

1. 共通の恩師——西晋一郎……18
2. 「全一学」とコスモスの思想……42
3. 丸山敏雄における「全一統体」の自覚……50

第二章 古代史をめぐる格闘

——津田左右吉への批判を超えて

1. 画期的な研究とその批判……66
2. 大逆と不敬——二つの弾圧事件をめぐって……88

第三章 「信」を得る険しい道のり

——湯浅真生との比較を通して

1. 宗教と出会うまで……115
 - ① 丸山敏雄の前半生……115
 - ② 湯浅真生の前半生……122
2. 「教団」と出会う……129
 - ① 勇躍する丸山敏雄……129
 - ② 疑念に惑う湯浅真生……144
3. 〈教師〉から先祖への道のり……156
 - ① 丸山敏雄の覚悟と回心……156
 - ② 湯浅真生の覚悟と回心……163

第四章 奇跡の人の靈魂体系

——川面凡児から受けた影響

1. 川面凡児という神道界の偉人……………188
2. 丸山敏雄が読み込んだ『川面凡児全集』……………198
3. 「教団」の靈魂觀と全一統体……………210
4. 川面神道の靈魂觀……………222
5. 丸山敏雄に与えた影響……………237

第五章 道德の再建に挑む

——天野貞祐と「徳福一致」

1. 天野貞祐の人物と業績……………262
2. 「道理の感覺」に根ざした道德論……………276
- (1) 道理への信念……………276
- (2) 道德の易不易と道德教育……………282

3. 旧道德と純粹倫理——丸山敏雄の道德論…… 290
4. 道德と幸福は一致するか…… 302

第六章 待ちつづけた師

——愛弟子・鳥居武二との深い絆と交わり

1. 師弟の契りを結んで…… 316
2. 火の出るような懇願…… 334
3. 恩師の身近に仕えて…… 345

あとがき…… 372



二作ある「至心」の書の一つ（竹陵は丸山敏雄の雅号）

